

## パネルディスカッション C

## 氷見山 幸夫氏報告へのコメント

小野寺 徹\*

環境を考える上で地図の果たす役割についての例をあげる。

2005年愛知万博は1997年に愛知県瀬戸市南東部の通称「海上の森」を会場としてその開催が決まった。当初、その誘致が企図されたときは典型的な大型公共事業であった。ところが1999年に入って大きく変更になった。その理由の一つは絶滅危惧種オオタカの営巣が発見されたことと、もう一つは「愛知万博会場跡地利用計画は20世紀型の開発にすぎない」と博覧会事務局幹部が環境 NGO に批判されたことが表面化したことである。この変更により2000年5月末、市民団体と自然保護団体が意思決定に参加する「愛知万博検討会議」が発足した。この組織は公共事業の計画への新しい市民参加の形態を切り開いたものとして評価されている。検討会議の議論を経て海上の森での会場計画は、当初の計画の約150ヘクタールから約10ヘクタールのみを登録会場とすることとなった（宇佐見，2000）。この変更のもととなったのが住民の作った環境診断マップである。この環境診断マップが世界の環境 NGO を動かすきっかけにもなったし、検討会議の際のアセスメントにも取り入れられたのである。

1997年に制定された環境アセスメント法は手続きの枠組み、市民参加のあり方、環境に対する考え方などが大きく改善され、アセスメントの対象となる環境要素の範囲が従来の公害項目や希少生物だけでなく、生態系や地球環境問題などにも幅広く設定された。特に「人と身近な自然の触れ合いのための評価項目」が加わった。上記の環境診断マップでは「昼寝を心地よくできる場所やほっとできる場所がなくなるのはけしからん」というような感覚的なもの見方についてもえがかれ、

これがアセスメントに取り入れられた。環境診断マップは環境を地図というコミュニケーションの道具を使って地域を診断したもので住民がどう目暮らしているのか、地域社会をどう見ているのかを人に伝えることができる（島津，1997）。

小野先生（北大）からも私たち地理学をやっている人間がやらなければならないことがたくさんあるとして次のような例が出された。放水路の問題で地理学をやっている人間が関わり問題が早く解決した要因の一つに地図がある。どこで洪水が起きたかとか、ここはどういう被害があったかということ議論する時、以前は反対する側も推進する側も全く地図というものを使わないで議論してきた。2万5000分の1地形図を千歳川流域だけを張り合わせると10数枚になるが、私たちはそれを常に持って行って「あなたの言っているここはどうなのだ。」とすぐ地図を見せる。事前にコンターでひいておいて何メートル以下の被害が多かったとか、地図を使いながらお互いに客観的なデータで議論していくという姿勢が、残念ながら環境のことをどんなにやっても普通の人は非常に遅れているということを初めて知った。だからまさに地理学をやっている人間が「地図を使えばこういうことがわかるのだ」ということを一般の人に教えてあげる必要がある。例えばゴルフ場の問題にしても、単に農薬の問題ではなく、その周りにどんな川があるかとか条件によって変わってくる。

「第5回私たちの身のまわりの環境地図作品展」の時、ある新聞社の女性記者が取材に来る予定なのに中々来ないで、やっと会場に顔を出した。この記者が遅れた理由は地図が嫌いということであった。ところが作品を見ているうちに夢中にな

\* 北海道滝川高等学校

り大変すばらしい紹介記事を書いてくれたことがあった。日本の地図教育は、伝統的に室内の読図作業や講義学習に偏していたきらいがある(氷見山, 1996)。地形図を読む, 白地図に色塗りをするという学習はそれ自身自己目的化すると何のために行っているのかわからなくなり面白いものとはならない。今, 高等学校において地理離れが進行している。その原因にはさまざまなものがある。上記のこともその一つである。地理教育の魅力の一つは, 小学校の子どもが好きなように学校の外に出て調べることである。地域を実際に素直な目で丁寧に見るとふだん見過ごしていたことが次から次へと発見され小さな感動の連続を生む。生きた「知」を獲得していく上での原点がこうした学習にある。第6回環境地図作品展で入賞した八島君(筑波大学附属駒場高校)は「善福寺川公園の植物調査」というテーマで地図を作成した。彼の地図のコンセプトは第一に「眺めるだけで楽しめる地図を作る」第二に「詳細な情報を盛り込む」ということであった。調べているうちに面白くなり雑草についても詳しく調べた。彼のコメントによると「雑草を調べるのにはかなり苦労したので, 今では道端の雑草を見るたびにあれは・・・だな, などと思うようになった。楽しく作成でき, 大変だったけど満足している。」とある。この作品が一つのきっかけとなり, 彼は環境の道に進んだとのことである(小林, 1997)。

環境地図学習は環境教育ばかりでなく生涯教育, 国際理解教育においても, さらに魅力ある地理教育を再生する上でも必要である。環境教育にとって大切なのは, まず地域の環境を豊かな感性と社会性をもって生活者の目で丁寧に観察することである。環境地図作成はフィールドワークで獲得した「知」をいかに表現するかという点で面白と同時に作品として展示することによって多くの人たちの共有財産となりうる点でも重要である。2003年より実施する「総合的な学習の時間」にまさにふさわしい内容である。

地球環境研究はGISの普及により地図が簡単に作れるようになったし, 使えるようになった。しかし, ちゃんと読んでいるかという疑問が残る。楽に地図が使えるようになったことが地図文化の普及にマイナスになりかねない。地図が飾り

で終わったり, 軽くならないようにしなければならない。と氷見山先生(北海道教育大)から補足があった。

学会編集幹事から北海道地理学会が貢献できることとして学会特別号で地図を出す制度があれば利用するかという提案が出された。そのことに対して羽田野先生(北大)は会誌もマンネリ化しているのでこれから環境・地図などいろいろなテーマで特別号を出したらそれを通して教育にも還元できるのではないかという賛成意見が出された。

#### 参考文献

- 宇佐見大司(2000): 愛知万博はどうなってきたか, そしてどうなるか, 歴史地理教育, 617, 80-85頁。  
小林汎(1997): 夏休みの課題—環境地図をつうじての環境学習, 筑波大学附属駒場中等学校研究報告第, 37集, 80-90頁。  
島津康男(1997): 市民からの環境アセスメント—参加と実践のみち, (NHK ブックス), 日本放送出版協会。  
氷見山幸夫(1996): 私たちの身のまわりの環境地図作品展について, 地図ニュース, 284, 3-8頁。